令和３年度　福祉文教委員会管内視察報告書

１．視察日

令和３年１１月１２日（金）

２．視察先

ＮＰＯ法人風の時代の学校（そら風スクール）

３．視察項目

不登校児童生徒の居場所として活動をすすめている「そら風スクール」の運営状況と活動の現状及び課題についての調査

４．視察の目的

不登校児童生徒が増加傾向にある中で、ＮＰＯ法人として活動をすすめている「そら風スクール」の活動内容等に関する聴取を行い、不登校児童生徒の現状と課題について調査研究をすすめる。

５．視察内容

◇「そら風スクール」開校の起因について

（経験の中から①）

教員生活の中で、不登校児童生徒とかかわってきたが、自分の子が不登校になり、不登校児童生徒に対する認識が大きく変わることとなった。

子どもの思いを尊重する姿勢を見せるようにしたら、子どもが「こころ」を開いてくれるようになり、登校できるようになり、就職もできた。

不登校という苦しみもあったが、子どもたちにもしっかり育っていく「力」があることを痛感した。

（経験の中から②）

自分の子は不登校とは縁がないと思っていたが、突然、不登校の兆候がみられるようになった。親として子の思いや考えを、そして、不登校の状況を冷静に理解することができず、あたふたするばかりであった。自分としては一生懸命子育てし、不登校は他人事と思っていただけにつらい日々となった。

担任の先生から「こんな体験をできることは宝物ですよ」との言葉に感激して救われ、不登校は悪いことではないと考えるようになった。

◇経験からの開校について

・高山市には「であい塾」が設置されているが、高山市には相当数の不登校児童

生徒がいるとされており、施設が足りない状況である。距離的な問題や環境的な問題で行くことのできない子どもがいる中で、子どもたちの居場所として開校した。
・失敗を繰り返すことで自己否定が大きくなり、ストレスの発散方法がわからず、暴力や自傷等の行動に入ってしまうケースがある。そうなる前に心のよりどころが親子ともども必要であると考えている。
・家に独りで親の帰りを待つのではなく、安心して過ごせる場所が必要である。
・子どもたちの日々の経験等は人生の中で大切な１日であり、不登校からの罪悪感の中で、過ごす時間は人生にとってもったいない。
・子どもたちや親御さんに声をかけて、青空でもいいから、お腹が空いたからみんなで何を食べようという要求に基づく活動からスタートしたのが「そら風スクール」である。
・不登校児童生徒のなかには発達障がいを併せ持つお子さんも少なくない。また、発達障がいの診断はつかなくてもグレーゾーンの診断もあり、一人ひとりに応じた対応が必要になる。

◇これまで取り組んだ内容
・クラウドファンディングを実施し、集まった資金で運営費に充てている。今後は企業や個人の賛助会費を募る予定である。
・無料相談等や体験入学を実施しているが、経費負担の面から入校まで至らないケースも多い。

◇今後の方針
・「そら風スクール」では、親としてどうあるべきかということを視点にして、自分も悩んでいる保護者と一緒に考えていける計画を立て、同じ思いを持つ人と物づくり等による仲間づくりも必要と考えている。
・子どもたちのためにもＮＰＯ法人として教育委員会にも働きかけ、子どもの居場所・学びの場として教材等の環境整備をすすめたい。
・子どもたちが、公立の学校ではないが、通学して友達としっかり勉強して自信をつけて、社会で生き生きと生きていけることを望んでいる。
・人生の中で忘れられない教育を受けさせてあげたい。高山市の令和３年度の教育の願い「郷土高山に根差した心に残る教育を創造する」を大切にし、ここで過ごした１日１日が心に残るものになるよう心掛けて活動している。
◇課題
・利用したくてもできない要因として、経済的な負担が大きいということがある。
・無料相談等や体験入学を実施し、入校されるよう取り組んでいる。利用料は全国平均と比較しても安価となっているが、不登校であっても、在籍する学校の経

費は負担しているため、保護者には大きな負担となることから、入校に至らないケースがある。
・支援金等の補助があったとしても、事業を運営していくためには大変厳しいものを感じている。

◇質疑の中から
・全国では支援制度のある自治体があるが、高山市からの支援は現在のところない。
・運営費は利用料で対応したいが、保護者の利用料の負担感が大きいことが大きな課題となっている。
・補助制度等によって利用料の負担が軽減されれば、利用者も増えると思う。
・教材は生徒が持参してくるものを利用している。市等からの支援はないが、ＩＣＴ教材のｅｂｏａｄを利用している。オンライン環境も整えているが、タブレットＰＣ等の機器を所有していない子どももいるので検討が必要。
・「そら風スクール」へ登校したことが、今後何らかの形で公立校の書類の中に明記されることを望んでいる。

６．考察

・不登校児童生徒が増加傾向にある中で、教育委員会においても高山市教育支援センター構想を策定し、不登校児童生徒対策を強化することとしているが、個々の不登校児童生徒への対応策は多様であることから、「そら風スクール」のようなオルタナティブスクールは不登校児童生徒の居場所の一つとして必要性は高くなってきていることを実感した。
・学校の運営が継続的に運営できることが課題となっており、支援策に関する調査研究が必要。
・不登校児童生徒に関する支援等を行う団体が複数存在していることから、団体間の連携が必要と考える。
・福祉文教委員会では、引き続き不登校問題や対応策に関する調査研究を行う。

※視察から報告書作成までの間に、名称が「風スクール」から「そら風スクール」に変更されました。